Art and New York

nygaho.com

THE NEW YORK GAHO

ニューヨーク画報

2006 No.1 創刊号

特集＝

アートに生きる。

ニューヨーク現在進行形アーティスト20人のインタビュー

9784990275501

ISBN4-9902755-0-0

C0070 ¥1000E

1920070010008

発行　ARアソシエイツ有限会社

定価　本体1000円+税

THE NEW YORK GAHO ニューヨーク画報 2006 No.1 特集＝アートに生きる。

AR ASSOCIATES INC.

キャラクターであってキャラクターでない、不思議な魅力。

D. DOMINICK LOMBARDI（画家）

BY HIDE MAEGAWA

人目をひくビビッドな色使い。ユーモラスではあるが、どこか怪奇的な線。あやしい絵画がウィンドウから、通りを行き交う人々をしきりに誘っている。

誘われるままギャラリーに入ってみた。怪奇と静寂が微妙なバランスを保つ空間があった。見渡してみるとモノクロの作品や、半立体の作品もある。

そこはドミニク・ロンバルディの個展会場だった。ドミニクの作品は近年数々の新聞や雑誌で取り上げられている。（本誌表紙の緑の作品は彼の新作）実際に会ってみると、作品のイメージからは想像できない物静かな人物だった。

ドミニクは、1976年にニューヨーク市郊外ウエストチェスターで初めての個展を開いた。ここで人体とロボットの融合を試みて以来、肉体をモチーフにした作品の制作を続けている。強い眼差しで自らの作品について語る姿は少年のようでもあり、修行僧のようでもある。

——とてもユニークな作品ですね。

「今回はわたしの今までの展覧会とは雰囲気が違います。会場全体に統一感があるでしょう。ひとつの物語になっていますね。こういうことは今までありませんでした。このタイプの作品は、わたしの活動の中で、もっとも長くやっているものです。このシリーズを始めてから7年になります。まだまだ途中であると感じています。もっとやることがあります。」

——あなたの作品をはじめて観たとき、描く線がとても自由であると感じました。

「よくそこに気が付いてくれました。わたしにとって線は絶対的なものです。線は物語を生みます。ものがいかに強いか、あるいは弱いか。いかに分厚いか、丸いか。線は表現します。わたしはこのことをとても価値のあることだと思っています。線がわたしにとっての優先事項なのです。作品のテーマのひとつに東洋との出会いがあります。東洋の筆は一本でたくさんのことを語ることが出来ます。これはあなたが日本の方だから言っているのではないですよ。東洋の筆は、動物や木という目に見えるものから、風、感情の起伏といったものまでも表現します。わたしも線にただのカーブである以上のものを語らせたいと、常々考えているのです。」

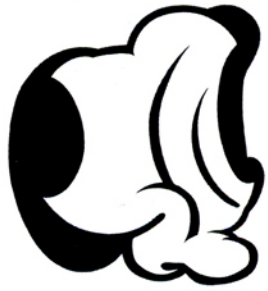
——ひとつの作品を仕上げるのにどれくらい時間がかかるのですか？

「プレキシガラスの作品は一枚仕上げるのに60時間かかります。この作品は裏から色を重ねて描いていきます。すべての色を透けないように三度塗りしています。この手間のかかる機械的な作業をしている時間は、わたしにとって瞑想の時間でもあるのです。集中して色を重ねているとき、わたしは心の中でキャラクターにいろいろな問いかけをします。キャラクターが生命を持ち始める瞬間です。」

——とても丁寧な作り方をされているのですね。

「そうですね。作品作りに対する態度は父から学びました。父は大工でした。12、3歳のころはよく手伝いをしていました。父からは、常に最高の出来をめざし限界まで努力をする姿勢を見せられました。どれほど小さな間違いでもそのままにしない。それから工具の使い方と工具を大事にあつかうということも教わりました。」

——アートをする上での喜びは？



「線を描く。色を選択する。こういうこと自体が喜びです。一日の終わりにその日の成果を見て、これはとても価値のあることだと感じる。至福のときですね。それから、たとえばこちらのシリーズの作品（本記事内カットの作品）に10代、20代の人たちが好意的な反応を見せてくれます。これも、とてもうれしいことです。彼らの年代は、いつも何か新しいもの、極限のものを探している。わたしの作品が彼らの求めに応じることができることは、とても素晴らしいことだと思っています。」ドミニクは少し考えてから続けた。

「いつも思うのですが、アーティストであるということは、ある大きな社会の一員であることを意味します。これはとても大きな社会です。この社会には何の隔たりも存在しません。地理的な隔たりも、時間的な隔たりもありません。もしあな

たが一度でもアートとのつながりを感じたとしたら、あなたはこの社会のメンバーになったのも同然です。何らかのアートとのつながりを感じたということは、時代や地域を越えてすべてのアートとつながったということです。太古の昔から未来にかけて。わたしはこの感覚をとても大事にしています。例えばこちらに頭をモチーフにした半立体の作品があります。何か民族的なマスクにも見えますし、演劇で使われるマスクにも見えます。」

——今までアートのために犠牲にしてきたことはありますか？

「いくつか大きなものがあります。ひとつはお金です。アーティストはあまりもうからないですから。わたしはアートにかかわる他の仕事もしています。ギャラリーのアドバイザーやキュレイター、学校の講師もやっています。雑誌に記事を書くこともあります。ほかに犠牲にしているものといえば、こちらの方が重大ですが、家族と過ごす時間です。スタジオで制作している時間が長いので、家族と過ごす時間がどうしても短くなります。

幸運にも、妻も娘も理解してくれていますが。」

——プレッシャーはありますか？

「プレッシャーはいろいろありますよ。一番のプレッシャーは、やはり制作に関することです。作品を作っているあいだは、あまりプレッシャーを感じることはありません。とてもリラックスしていられます。でも作品が仕上がるとプレッシャーを感じはじめます。作品を一つ仕上げたのはよいことだが、また作ることができるのだろうか、よりよい作品ができるのだろうかと。だから、いつも複数の作品を同時に作るようにしています。ひとつの作品を仕上げても、他の作品は制作中という状況を故意に作り出すのです。」

——いつごろからアーティストになろうと思い始めたのですか？

「幼いころ、両親が百科事典を買ってくれました。まだ文字を読めなかったはずですが、よく本棚から引っ張り出しては眺めていました。ある時、偶然ピカソのゲルニカが載っているページを見つけました。もちろん、その絵に込められたメッセージを理解できるわけがないのですが、とても強い衝撃を受けたことを覚えています。今でもはっきりと覚えています。あれ以来、人々に強い影響をおよぼす作品を作りたいと思い続けています。幼いころに、自分にとって大切であると思ったことを、今でも続けていることに誇りを感じます。絶えずヴィジョンを修正しながら、自分の目指す方向へ進んできました。人生ではいろいろなことが起こります。自分にとっての真実を手放さないように、いつも注意してきました。」

——ニューヨークからどのような影響を受けましたか？

「とても大きな影響を受けました。ここは70年代から80年代にかけて世界のアートの中心でした。今でも、かつてほどで

はないにしろ、とても強い影響力を持っています。たくさんの美術館やギャラリーがあり、また多くのコレクターも訪れます。アーティストにとって非常にチャンスの多い都市だと思います。」

——聞いていないことで、言っておきたいことはありますか？

「アーティストであり続けるということは大変勇気のいることです。なぜなら、作った作品は人に見せないといけません。しかし拒否や否定的な意見に遭遇することがしばしばあります。自分の望んだギャラリーに取りあつかってもらえなかったり、どうしても参加したかった展覧会に入れてもらえなかったり。また、自分の展覧会に関する悪い批評を書かれることもあります。そういった経験を乗り越えていくには勇気が必要です。アートに人生をささげる人たちは、とても勇気があると思います。自分と全く同じ考えの人は地球上すべてを探しても見つからないでしょう。だから作品を作り続けていかなければならないのです。」

——最後に、アーティストを目指す人にアドバイスを。

「アートに関することにいろいろと関わる方がいいでしょうね。先ほども言いましたが、わたしはアドバイザー、キュレイター、ライター、講師といった仕事もしています。こういった仕事をするということは、自分自身を発表していることになります。とくにキュレイターとライターに関しては、他の人と協力して仕事をすることが多く、アートに関する考え方が色濃く出ますので、大事だと思います。誠実に、そして注意深く仕事をしていると、アートビジネス界の仕組みが見えてきます。将来自分がすべきことが分かってくるでしょう。わたしからのアドバイスとしてはこういったところです。アーティストとしては、コンセプトでも材料でも好きなようにすればいい、いや、好きなようにするべきです。」

わたしにとって線は絶対的なものです。線は物語を生みます。